

書評

武上眞理子著

マン・オウ・サイエンス
科學の人・孫文——思想史的考察——

高柳 信夫

—

評者にとって、孫文という人物は、長きにわたって捉えがたい存在であり續けてきた。

いうまでもなく、孫文は中國近代史において大きな足跡を残した「偉大な革命家」であり、その點は何人も否定しえない（もちろん、その「偉大さ」の意味については、各人各様の解釋がありうるが）。さらに、孫文の文章そのものにはさほど難解なところは無く、従って、章炳麟のように、テキストにあらわれた文意を把握すること自體が困難だということではない。

ただ、評者には、孫文が、自身の「學說」の正確性や實現可能性に對して表明している、あの異様といつてもよい自信（あるいは一種の「押しつけがましさ」）の「背景」が、今ひとつ理解しがたかった。

例えば、孫文が「從來の革命運動の中で表明してきた、斷片的な哲學思想や政治思想を集大成し、獨自の革命哲學として理論

化・體系化した著作」（深町英夫「孫文學說——行なうは易く知るは難し」（抄）」解題。同氏（編）『孫文革命文集』、岩波書店、二〇一一、二七〇頁）とされる『孫文學說』（一九一九）ですら、その議論は、「中國古典から國際情勢、はては自然科學に至るまで、雜駁とも言える廣範な知識を援用しつつ、時に強引ですらある論法により展開される」（同前）と指摘されるように、堅固に構築された「學說」とは言いがたいものだが、孫文の自信は全く揺るぎがない。

確かに、『孫文學說』では「科學」が一つのキーワードとなっていて、孫文の自身の「學說」への自信も、その「科學性」への確信がそれを支えていただろうということまでは容易に想像がつく。

ただ、同じく「科學」を自らの所説の根據とするといつても、例えば、歸納論理を出發點とする認識方法を重視した清末の嚴復や、「敬告青年」において個人の理性の働きを強調した新文化運動期の陳獨秀などは、「科學」を一つの「方法」「態度」とみなし、個々の「科學的知識」のみならず、それを導き出す主體の側の方にについても重きを置いている。一方、「孫文學說」での「科學」への言及などを見ると、孫文のいう「科學」は、すでに確立され、「既製品」として流通している（あるいは、將來確立されるであろう）「科學的知識」という意味合いが強く、「科學的知識」を生み出したり、偽の知識を批判したりする主體の精神的活動への言及は少ない。つまり、嚴復や陳獨秀にとっては、「科學的知識」の普及とともに、各個人が「科學的であること」が、重要な課題であつたのに對して、孫文にとっては、人々が「科學的

知識」を受容し、それに従って行動することこそが第一に重要であり、「科學的知識」そのものは専ら人々の「外部」から與えられるものであった。そして、様々な「科學的知識」同様、彼の「學說」も、その「科學性」ゆえに、中華民國の國民たるものは、それを「そのまま」受容し實踐すべきものだと思識されていたかのようなのである。

このような孫文の議論は、ある意味で非常に「分かりやすい」。ただ、そのあまりの「分かりやすさ」ゆえに、評者は、彼の自説への自信の背景となっている「科學」觀をどのように考えたらよいか、結論を出せずにいた。

そうした中で、ここに取り上げる武上眞理子氏の新著は、孫文の藏書目録や關聯資料を駆使して、彼の「科學的知識」の源泉を、當時の世界的な「ポピュラー・サイエンス」の潮流の中に位置づけ、さらに、孫文にとつての「科學」とは、まず第一に「應用科學」であつたことを改めて明らかにし、評者がこれまで捉え得なかつた孫文の「科學」觀の輪郭を提示し、評者に違和感を抱かせてきた孫文の「知的態度」の背景を明らかにしてくれた。同時に、本書は、「科學」を基軸として、狹義の革命思想にとどまらない「孫文思想」の全體像を見渡す上での有力な一つの視點を提供するのみならず、孫文における「科學を糸口とする彼の思想の深まり」「科學から哲學への架橋に向かう思想的深化」(一三頁)をも跡づけるという野心的な試みを行つており、孫文研究に新たな一石を投ずる著作といつてよいであらう。

二

本書は、著者武上眞理子氏が二〇一二年に京都大學大學院人間・環境學研究科に提出した博士學位論文に加筆修正を行ったものである。まず、その構成を確認し、各章の内容を簡単にまとめておく。

本書の構成…

はじめに

緒論 孫文思想の見取り圖

第一章 孫文の科學觀 —— その原點と到達點

第二章 孫文と醫學 —— 『紅十字會救傷第一法』の翻譯と出版

第三章 『實業計劃』の同時代的位相 —— 中國經濟開發計劃の背景とエンジンたち

第四章 孫文と工學 —— 「太平洋の時代」における上海港

終章 近代科學思想と孫文

補論 孫文と南方熊楠

「はじめに」において、著者はまず本書の基本的スタンスを、孫文を「マン・オブ・サイエンス」、即ち「この時代が多數輩出した、廣義の科學に通曉し、それを職業とするよりはむしろ自らの思想と行動を統べる原理とした人々」として位置づけることだとする。その上で、本書の目的として、「孫文の科學觀の成り立

ちを同時代の『サイエンス』の傳來から翻譯、普及と應用を含む文脈の中に可能な限り詳細に跡づける」こと、および『サイエンス』に發する孫文思想の深化の過程を追ひ、その特質と意義について考察する」ことを掲げる。(以上、四頁)

續く「緒論」では、まず孫文思想をめぐる研究史が概観される。著者によれば、一九八〇年代以降、中國などでも、かつての中國國民黨や中國共產黨の公定史觀から脱却した研究が見られるようになったが、むしろ「孫文の名にはより個別的・具體的な政治的文脈の中で、その正當(正統)性を保證する役割を賦與される傾向がかえって強まった」(一〇頁)という。また、日本や歐米の研究においても、イデオロギーにとらわれない様々な實證的研究がこれまで提出されてきてはいるものの、現時点においては、「孫文の思想それ自體に正面から取り組む研究がやや低調となりつつある感は否めない」(一一頁)とされる。そこで、本書では「革命家としての孫文の行動とは別の次元から彼の思想形成の歩みに光を當て」「孫文像を從來とは異なる角度から描出すること」が構想される(一二―二頁)。

さらに、孫文の科學的知識の背景について、十九世紀後半には、ポピュラー・サイエンスの出版物が「専門家たちの出版物をはるかにしのぐ賣り上げを誇っていた」(一四頁)ことを指摘した上で、「孫文が『眞の知識』と確信できる科學にアクセスする回路は、ポピュラー・サイエンスに分類されるさまざまな書物によって開かれた」(二五頁)と判斷する。

こうした判斷を支える根據となるのが『上海孫中山故居藏書目錄』であるが、著者は、それに加えて、同目錄の編纂およびその

ための調査を主導した中村哲夫氏のメモをも参照し、本書全編にわたって、孫文の藏書について當面知りうる情報を最大限に活用している。

第一章では、まず、孫文の「科學」觀の原點として、孫文が學んだ香港西醫書院について、教員の出自なども踏まえた上で、その教育のあり方が具體的に示され、次いで、著者が孫文の「哲學」の基礎として重視する「生元」説や、それが擴張された孫文の國家論が論述の對象とされる。さらに、孫文の「生元」説の着想の來源となったアメリカのネルス・クエブリ(Nels Quenby)の「細胞の知性(Cell Intelligence)」(一九一六)の内容や、ヘッケルと孫文や石川千代松の所説との關係が検討され、その上で、「生元」説の現代的意義が論じられる。

第二章では、孫文がロンドン亡命中の一八九七年に翻譯した『紅十字會救傷第一法』(原書は Samuel Osborn, *Ambulance Lectures: First Aid to the Injured*)を取り上げ、原書の著者オズボーンの紹介や孫文の譯書の出版の経緯の検討、原書の日譯本や各種字書類との醫學關聯語彙の譯語の比較に加え、本來聖ヨハネ救護會のテキストとして出版された原書の翻譯の表題に、孫文が「紅十字會」の語を附した意圖や、その背景となった中國と赤十字運動との關係が探られる。そして、著者によれば、この譯書の中の「科學的」救急法も「ポピュラー・サイエンスの一形態」であり、孫文は「大衆に向けた『科學の唱道者』の位置に立つことができた」(八二―三頁)と結論づけられる。

第三章と第四章では、孫文の『建國方略』の第二部分『實業計劃』(一九二二年初版)が論じられる。

第三章では、近年の中國で、「社會主義市場經濟」政策との關聯から、「經濟思想」としての側面が注目されることの多い『實業計劃』を、「工學の書」として讀み解くことで、『實業計劃』の新たな同時代的位相を見出すことが目指される。こうした意識の下で、一九一九年から順次發表された『實業計劃』の英文・中文の兩稿の刊行の過程が明らかにされた上で、當時の讀者の反應や同時期の中國の開発計劃との關聯性が論じられる。さらに、『實業計劃』は、當時の中國においても、すでに、工學を學んだエンジニアによって「工學の書」として讀まれていたことが示唆され、彼らの觀點は、「軍事目的の技術と一線を劃し、公益事業を企劃・建設すること」を明示する「シヴィル・エンジニアリング」の原義にも即したものの（一〇七頁）だと指摘される。

第四章では、さらに孫文の「東方大港」計劃が取り上げられ、『實業計劃』の具體的内容が検討される。この計劃は、國際貿易港である上海港が抱える沈泥による閉塞という構造的問題に對應するための一試案であるが、この件については、孫文以前にも上海浚浦局（一九一二年設立）による築港計劃などがあり、その前提として詳細な調査が行われていた。著者は、これらの計劃と孫文の「東方大港」計劃を比較し、孫文案の特徴を描き出すとともに、孫文が立案に當たつて、浚浦局關係の各種報告書を用いていたことを、孫文の藏書に基づき明らかにする。さらに、孫文の計劃を、「近代中國における科學的水利事業の創始者」と評價される張謇の隣接地域での水利構想と對照して、「マージナル・マン」としての孫文と、「郷紳層の代表者」たる張謇のまなざしの相違を指摘する。

終章において、著者は、それまでの各章の内容を概括した上で、孫文の科學觀は「主に讀書から吸収した科學的知識を自らの直面した問題に對してその都度柔軟に運用することによって形成されたもの」（一三七頁）との見解を示す。そして、彼の科學的知識の情報源として、雑誌『サイエンティフィック・アメリカン』、『ホーム・ユニヴァーシティ・ライブラリー叢書』、エモリー・ジョンソンの著作などに觸れ、特に『ホーム・ユニヴァーシティ・ライブラリー叢書』は、孫文の「人文・社會科學を含む『廣義の科學』の知識の源」であり、ここから得られた廣範な知識は、「孫文の（廣義の）科學觀の骨格を形成していった」（一三八～九頁）とする。さらに、孫文の藏書にベルクソンやオイケンなど、「生の哲學」に聯なる思想家に關する書籍が少なくないことを指摘した上で、彼の科學に關する知識は、單なる「有益な知」にとどまるものではなく、その背後には、それを「有用な知」からなる「生きた全體」として統合しようとする意思があり、その方法は機械的な蓄積ではなく、世界や人間を「生きた全體」としてとらえようとする「生の哲學」であつたとし、ここに孫文における科學と哲學の架橋が成就した（一五〇～一頁）と評價する。

また、最後の「補論」では、一八九七年にロンドンで三箇月餘り交流し、その後、一九〇一年に和歌山での束の間の再會を果たした孫文と南方熊楠の出會いの意味が、主として二人の科學觀という觀點から論じられる。その中で、南方熊楠が、孫文の「ポピュラー・サイエンスの指南役」として役割を果たした可能性が指摘されている（一六八頁）ことは注目される。

三

さて、以上、本書の内容を駆け足で振り返ってきたが、その論述は、中文資料のみでなく、日文・英文資料も幅広く駆使して、孫文自身の履歴や発言のみでなく、それを取り巻く同時代の『サイエンス』の状況にまで目を配った周到なものであり、著者が「はじめに」で掲げた「孫文の科學觀の成り立ちを同時代の「サイエンス」の傳來から翻譯、普及と應用を含む文脈の中に可能な限り詳細に跡づける」という目的は、非常に高い水準において實現されているといつてよいであろう。

それに對して、いま一つの目的である『サイエンス』に發する孫文思想の深化の過程を追ひ、その特質と意義について考察する」ことに關する部分、即ち、孫文の思想そのものを考察の對象とした部分の内容については、なお、幾分のブラッシュアップの餘地があるように思われる。もちろん、著者の結論そのものには同意しうるものも少なくないが、手續き論として、著者の判斷を支える「孫文自身のテキスト」が必ずしも十分に提示されていないように見えるのである。

例えば、孫文の「生元」説を基軸として孫文の國家觀を論ずる部分などはその一例であろう。

前述のように、『孫文學說』にみられる「生元」説は、アメリカのクエブリの『細胞の知性』に着想を得たもので、孫文は、クエブリが「生元（＝細胞）は知を有する」という理を明らかにしたことを劃期的なことだと評價していた（三九～四一頁）。

さらに、著者は、陳立夫が示した、「生元」は物質であるにと

どまらず精神を有する存在であり、この物質と精神の關係は、中國で言うところの陰と陽に等しい、という解釋を一つの手がかりとし、孫文の「生元」説は、唯物主義か唯心主義かというドグマ的な枠組みではその真相は明らかにしえず、そこでは「近代的な『科學』の思想と中國の傳統的な生命觀を包括する知の枠組みが生まれつつあった」（四七～八頁）と評價するが、評者も、大枠として、このような解釋が成立する可能性があるということには同意できる。

ただ、著者は、さらにより具體的な内容に踏み込み、人體を「生元によつて構成される國家」とみなす孫文の發言などを根據に、「だとすれば現實の國家を構成する『生元』は人間を措いてほかにない」とした上で、

『孫文學說』において人類進化の時期は、「草昧から文明に進み、知らずして行なう時期」と、「文明からさらに文明に進み、行なつて後に知る時期」、「科學が發達して以後、知つて後に行なう時期」に分割される。この進化に伴つて國家の「生元」たる人間は、「先知先覺」（發明家）、「後知後覺」（鼓吹家）、「不知不覺」（實行家）に分化する。したがつて人類の高度な進化を達成するためには、「知る生元」「傳える生元」「働く生元」の３種が緊密に聯携し、相互に必要な役割を果たさなければならぬ。ここに至つて、孫文が描く理想國家建設の道程が「生元」と進化の論理で正しく證明されることになる。（四二頁）

と解するのだが、この一聯の論述の中では、その根拠となる孫文自身の發言が十分に提示されているとはいえない。

確かに孫文は人體が「生元」によって構成される國家であるという比喩は用いているが、「人間は國家を構成する生元である」という判斷については、直接孫文の發言は参照されていない。實は、『孫文學說』の中で、孫文が、人體を「生元」によって構成される國家」とみなした部分は、文脈としては、人間の飲食について論ずる個所であり、國家の問題を論ずる個所ではない。孫文はクエブリが明らかにした「生元は知を有する」という理に言及した後、「人體が生元によって構成される國家だとすると、體内の飲食の機關はまさに生元の食糧製造所であり、人が飲食する物はつまり生元の使用に供される物資だ。生元が人體に依據して生活するのは、あたかも人類が地球に依據して生活するのと同じであり、生元が人體の各部分に集まっているのは、あたかも、人類が各都市に住んでいるのと同じだ。人の生活にとって、寒さと飢えを防ぐことはもっとも大切なことだが、生元でも同じだ」(『孫中山全集』第六卷、一六三頁(中華書局、一九八五))。譯文は伊地智善繼・山口一郎(監修)『孫文選集』第二卷(社會思想社、一九八七)、一三三頁、に據る)としているが、これらはいずれも専ら「人體における」『生元』は、(國家における)人類に類似している」との主張で、いわば「生元は知を有する」というクエブリ説を具體的な比喩を用いて説明したものであり、この個所での議論の主題は専ら人體の側にある。

もちろん、國家有機體説や社會有機體説が有力な考え方として存在していた當時において、孫文が「(國家における)人類は、

(人體における)『生元』に類似している」という「逆方向のアナロジー」を一つのイメージとして受容していた可能性はある。しかし、著者自身が四一頁において引用するように、孫文が「世界進化」の段階として『生元』の發生から人間に進化するまでの時期」と「人間が相互扶助の原則にしたがって人類進化の目的を達成する時期」を一應區別している以上、この「逆方向のアナロジー」を孫文自身が自らの國家論の根拠として強く意識していたと斷ずるには、そのことを示す孫文自身の發言を別途挙げる必要があるだろう。

また、孫文は、「人體の各機關は、その組織の完全な點、その運用な巧妙な點で、現代の國家組織にはるかにまさる。しかも、人體の奥妙さは、人類の今日の知識でも、なかなか窮められるものではない」(『孫中山全集』第六卷、一六三頁・『孫文選集』第二卷、二二頁)と述べ、人體と國家を、一應、レベルの違うものとして區別している點から見ても、孫文が「國家」の比喩として「人體」を用い、「人類」は「生元」に類似していると考えていた(その逆ではない)と結論づけるためには、その判斷を支える孫文のテキストが別途示されるべきであろう。

また、かりに孫文の國家觀を、「生元」説に基づく一種の「國家有機體説」的なものとする著者の解釋を受け入れたとしても、著者がそれを「國家への忠誠や服従の必要ばかりを強調する全體主義的國家論とは一線を劃する」(四二頁)、「獨裁や全體主義を容認する國家論に歸着するとは考えにくい」(四三頁)と評價する點については、一定程度の留保が必要であろう。

確かに、孫文自身が明示的に「全體主義」や「獨裁」を良しと

することは無かったかもしれない。しかし、社會の進化とともに人間は「先知先覺」「後知後覺」「不知不覺」に機能分化し、人類の高度な進化を達成するためには、「知る生元」「傳える生元」「働く生元」の三種が緊密に連携し、相互に必要な役割を果たさなければならぬ、とする國家論は、より巧妙な形で、「知」による「壓制」を招く可能性はないだろうか。

前頁に引用したように、著者の解釋によれば、孫文は、人類進化の第三段階たる「知つて後に行なう時期」に向かう進化の過程においては、「先知先覺」「後知後覺」「不知不覺」という分化が進展するものと考えている。そうなると、社會の進化が實現してゆくとともに、「先知先覺」が明らかにした「知」(孫文の場合、それは人文・社會科學を含んだ廣義の「科學的な知」を意味するであろう)がそのまま「後知後覺」から「不知不覺」に伝えられ、「不知不覺」によって實踐に移されるという一方向的な關係(それは、ポピュラー・サイエンスによる科學的知識の大衆化のプロセスに類似する)が一層強化されることになるが、この圖式においては、「科學的知識」(と稱されるもの)⁽²⁾を常時批判的に檢證してその正しさを確認する機制が缺けている。

確かに、孫文の「先知先覺」「後知後覺」「不知不覺」という分業の圖式は、「科學的知識」をめぐる社會狀況の卓拔な「記述」であることは間違いない(今日の情報技術の現況を見れば、その「記述」としての的確さは益々増しているともいえる)。しかし、この分業の圖式に「規範」性が附與されたり、その適用對象となる「知」の範圍が不適切に擴大された場合、それが「先知先覺」による「壓制」に歸着する可能性もあるだろう。

また、著者は、孫文の國家論が全體主義的なものと一線を劃するものであることを示す根據の一つとして、クエブリが、細胞の「獨立した細胞個々の自立した知性から生まれたはたらき」を重視し、「高度に進化した神経システムにおいてクエブリが認めるのは、細胞相互の『制御』(control) 關係であり、『支配』(dominate) 關係ではない」としていることに言及し、「このようなクエブリの細胞論から着想を得た孫文の『生元』説が、獨裁や全體主義を容認する國家論に歸着するとは考えにくい」(四三頁)とするが、この點に直接關聯する孫文自身の發言は擧げていない。さらに、クエブリのいう「制御」はあくまで「細胞相互」によるものであるのに對して、前述の孫文の圖式の中では、「後知後覺者」「不知不覺者」が「先知先覺者」をどのように「制御」するのかは見えてこない。

いささか極端な例かもしれないが、『孫文學說』第六章「能知必能行」の末尾において、孫文は全ての中國人が中華民國の國民としての宣誓を行うことの重要性を強調し、自ら率先して誓いを立てるが、その文言に、「三民主義を實行し、五權憲法を採用する」とあり、この宣誓を行わぬ場合は「依然として清の遺民のままである」とされる(『孫中山全集』第六卷、二二五頁。『孫文選集』第二卷、一〇七―八頁)。

これは、孫文が構想する「眞の中華民國」は、原理的には一應孫文以外の人間も改定しうる五權憲法はともかくとして、「先知先覺」たる孫文の提示する一つの政治理論でしかない三民主義までも、孫文という個別の人格を超えた眞理として承諾する(逆にいえば、それ以外の「政治理論」は認めない)ことを、全國民に

迫る國家であることを意味する。この發言から見るかぎり、「先知先覺」たる孫文が、自身を「生元（細胞）相互」の「制御」の對象となるとみなしていたとは考えにくいであろう。

以上は、孫文の「國家論」をめぐる問題であるが、孫文の「生の哲學」に關しても、孫文自身のテキストに即した議論がいささか不足しているように見える。

著者は、終章において、孫文の藏書の構成から、彼がベルクソンやオイケンの影響を受けた可能性を指摘しつつ、孫文の生み出した独自の「生の哲學」について論じようと試みる。ただ、その論述においては、一般的な意味での「生の哲學」や「哲學」という譯語に關する説明は詳細に行われているものの、孫文自身のテキストに即して「孫文の『生の哲學』」の姿を具體的に浮かび上がらせるという作業については、さらに補足が必要であるように思える。

例えば、「孫文の『生の哲學』」に關聯すると思われる記述を見てみると、孫文の「哲學」について、「より大きな『生』の成就へと向かう實踐哲學」（一四六頁）、「世界や人間を『生きた全體』としてとらえようとする『生の哲學』」（一五一頁）、「彼獨自の理解による『生の哲學』」（一五二頁）などという記述がある。その前後の部分と合わせて讀めば、確かに孫文がある種の独自の「生の哲學」を志向していたのではないかと豫想することは不當とは言えないが、著者の判斷の根據となる孫文自身の發言が十分に提示されていないために、孫文自身の「生の哲學」の具體的な様相が必ずしも明確になっていないということも否定できない。

以上のコメントは、評者の個人的な關心に引きつけて、些末な問題をいささか針小棒大にあげつらつてしまっているかもしれない。また、ここに示された疑問點は、いずれも、著者の判斷の根據となる孫文自身のテキストを補足しさえすれば解決することが可能なものであるので、著者の今後のさらなる孫文研究の深化の過程の中で、自ずと解消されていくものと信ずる。

いづれにしても、本書は、「偉大な革命家」孫文を「科學の人」として再定位することによって、従来の研究において見落とされてきた側面を描出し、新たな孫文像の一端を示し得たことは確かである。特に、同時代の文脈を詳細に跡づけながら、孫文の「科學觀」を明らかにするという點においては、本書は従来の孫文研究を大きく進めるものであり、このことは高く評價されるべきであろう。

ただ、近代中國における「科學の人」は孫文のみではないし、「科學の人」と一線を劃する思想家にとっても「科學」は決して無視し得ないものだったはずである。評者としては、今後さらに、武上氏が、「科學」を基軸として、孫文のみにとどまらず、さらに幅廣く近代中國思想史の新たな側面を描き出すことを期待したい。

註

（一） 本書によれば、孫文の翻譯の底本は第三版（一八九四年）である（六一頁）。同所に附された注によれば、第二版が一八九〇年、第四版は一八九九年に出版されているが、初版の出版年は不明とされる。ただ、Internet Archive (<https://>

//archive.org/index.php) 所収のオックスフォード大學所藏とされる同じ著者・書名の書籍 <https://archive.org/details/ambulancelecture00osbogooq> (最終閲覧二〇一五年二月九日) は、一八八五年出版とされており、初版との關聯性も考え得る。ただし、この書は、Read Online の劃像には、口繪や扉頁がなく、また、PDFファイルでは、扉頁は収められていないものの、口繪は一部の斷片が見えるのみで參考にならず、最終的には現物に當たつて確認する以外にない。著者が初版年を不明としたのはそのためかもしれないが、何らかの言及はあつた方がよいのではないだろうか。

(2) 假に孫文の圖式に寄り添つた上で、あえてこの機制を考えたとすれば、「先知先覺」を「科學の専門家集團」とし、その集團内部における相互批判がそれに相當するとみなすことも不可能ではない。ただし、ポピュラー・サイエンスをその「科學的知識」の來源としていた孫文が、こうした意識を持つていた可能性はさほど高くないだろう。また、著者は、一四六頁において、孫文の國家構想においては、「先知先覺者」が理解し運用する「科學の知」が、生命體としての國家の隅々にまで「循環」し、科學の方法と成果は特定の少數者に圍い込まれることはない、などと論ずるが、それが眞の意味で「循環」であるならば、何らかのものが「先知先覺者」

のもとにフィードバックされねばならないはずであるので、「浸透」「浸潤」とした方がより適切だと思われる。そして、國家の隅々まで「浸透」「浸潤」する「科學の知」が特定の政治理論であつた場合、そこに一種の「全體主義」が成立する可能性は皆無ではない。(もちろん、「一方的に浸透させられる政治理論」の内容が「デモクラティック」なものでありさえすれば、それは「全體主義」とはいえない、と主張することも不可能ではないが、それは評者の考えとは異なる。)

(3) 著者の引用によれば、クエブリは、「細胞の共和國」にも喩えられる存在である生命體においては、「特定の中心は存在しない」とするが(四二頁)、個々の細胞に知性を配當するクエブリの議論は、ハーバート・スペンサーが生物有機體に對する社會有機體の特徴として掲げる、「社會には感覺中樞は存在せず、感覺はその構成單位(個人)の方に存在する」という、周知の所説を容易に想起させる。クエブリとスペンサーの直接の繋がりの有無を検證することは困難であるが、形式的には、クエブリの「細胞の共和國」は、スペンサー的社會有機體のモデルの方を、生物有機體の側に適用した可能性も考えうる。

二〇一四年二月 東京 勁草書房
A五判 八十二八二頁 四〇〇〇圓十税